

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第

卷五十三第

行發日一月九年七和昭

論叢

滿洲國稅制及其批判

法學博士 神戶 正雄

時差說覺書

文學博士 高田 保馬

船腹過剩問題の意義

經濟學博士 小島昌太郎

時論

沿岸漁業者問題

經濟學士 蜷川 虎三

研究

中央銀行の獨立性より見たる政府貸上金に就いて

經濟學士 松岡 孝兒

總體經濟と個別經濟

經濟學士 大塚 一朗

幕末の財政紊亂について

經濟學士 大山敷 太郎

ゼツエーリングの統一貸借對照表について

經濟學士 熊本 吉朗

說苑

爲替相場變動の原因について

法學士 正井 敬次

企業豫算制度の米國に於ける現状

經濟學士 山本安次郎

ブルタン氏の國家收入論

經濟學士 大谷 政敬

ゾンバルト教授の百貨店觀

經濟學士 堀 新一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

ズルタン氏の國家收入論

(社會學的財政學とズルタン

氏の國家收入論)

大谷 政 敬

統治團體の需要配分の行動(支出)と手段調達の行動(收入)は、國民經濟上、並に私經濟上の觀點よりするも現代社會に於て拭ひ消すことの出来ない鋭い特徴を有して居る。この事實は、財政學をば、其の對象の社會的性質に應じて研究するとするならば、即ち外面的な現象に膠着することなく深刻な洞察をなすとせば、財政學の研究は社會學的に方向付けられねばならないことを意味する。

吾人はかゝる方向付をもつた研究態度よりする財政學をば、社會學的財政學と稱し得ると思ふ。尤も社會

學的財政學と云ふても或る著作は、著しく歴史的に方向付けられて居るものあり、他の著書では、より一層理論的な方向をとれるものがある。これ蓋し社會學的研究自體の本質が、換言すれば社會現象そのもの、本質が、由來歴史的理論的存在であるからして、人により志向、力點を異にするにより、或る場合には歴史的契機が後退して、理論的契機が高調されるからである。

いま次に、ズルタン氏に従ふて¹⁾、社會學的財政學の分野を擧ぐれば、歴史學派と理論學派に大別し得る。先づ歴史學派に屬するものとしては、財政學の社會學的研究を企てた最初の人たる奧太利のルードルフ・ゴールドシャイド氏と²⁾、最近に於ては、財政學界に於ての輝やかしい勞作として推獎されてゐるホルスト・イエヒト氏を擧げ得る³⁾。兩者とも財政現象の歴史的契機を高調する點に於ては軌を一にして居るが、ゴールドシャイド氏は政策的であり⁵⁾、イエヒト氏は哲學的である⁶⁾ところが相違して居る。

理論的方向をとれるものとしては、十九世紀獨逸財

1) H. Sultan, Die Staat-einnahmen S. 3-4.

2) 氏の著作: „Staatssozialismus oder Staatskapitalismus. Ein finanzsoziologischer Beitrag zur Lösung des Staatsschuldenproblems.“ „Staat, öffentlicher Haushalt und Gesellschaft.“ Hdb. d. Fein.-Wiss., Bd. I. Steuerverwendung und Interessenpolitik.“ Schriften des V. f. S., Bd. 174, Erster Teil.

3) Sultan, A. a. O. Vorwort.

政學の諸巨匠を數えることが出来るが、彼等の財政理論は、奧太利の限界効用學派の理論と社會學、特に政治社會學とが交互に何等關聯するところなく併立して居るので、社會學的に見て不充分である。たゞ最近に於て、コルム氏の優れたる研究があるのみである。

ズルタン氏は、上述の如き科學的狀勢よりして、社會學的財政理論の試みとして、今度、「國家收入論」を江湖に送るに到つた。本書は、先づ社會學的財政理論の問題論に就ての課題を論じ、しかる後、國家收入の社會學的理論を展開して居る。いま、氏の構想が那邊にあるやをば、同書の前言なり序論で求め、以て紹介の言葉としよう。

氏の學的根柢態度は、「現象學の豫備概念」の意味に於ける「事實そのもの」(“Zu den Sachen Selbst!”)といふ格律にある。この格律をば、財政的に表現すると、財政學は現實科學であり、國家と社會が存在する限り、赤裸々な現實態が財政學に成立し生成する。かくてこの現實態をば「活眼を開いてそして忠實に記述

ゾンバルト教授の百貨店觀

する」にある。

更らに、一般的智識學の綱要に就ての見界を窺ふに、斯學は、財政學の基礎的意義を究明するには不可缺ではあるが、學的粉飾 (Vorschuh) に陥つてはならないとする。而して又、同氏の高調する社會學的立脚點は何處にありやといふに、即ち社會學的羅針盤の何れの方位にあるやといふに、大體に於てマクス・シェーラーの「現實社會學と文化社會學の立場に基いて居るとする。たゞ彼が、シェーラー氏の問題的表現では現實的要因と文化的要因との結合が往々外面的であるが、氏にとつては、一層内面的であるとするところである。

(此の點に就ては特に同氏の脚註參照)

- 4) H. Jecht, Wesen u. Formen der Finanzwirtschaft.
- 5) 阿部賢一博士、財政學史參照(改造社版、經濟學全集第二十卷、一五六頁乃至一七二頁)
- 6) 拙稿、立命館學叢(財政學文献の諸方向、イエヒト氏の財政の場所、イエヒト氏の財政の意味、諸論文參照) Sultan, A. a. O. S. 4.
- 7) Sultan, A. d. O. S. 4-5.